

〈ヨーロッパ〉への叶わぬ夢

ーヴィルヘルム・ラーベの『ライラックの花』の
作品世界としてのプラハー

久保田 聡

I. ライラックの花、甦る 〈過去〉

私は医者である。年老いた臨床医で、衛生官でもある。4年前から私は三等赤鷲勲章受賞者の榮譽に浴している。私は今世紀に先立つこと数年前にこの世に生をうけたのであるから、七十歳になるのもあとわずかである。⁽¹⁾

冒頭にいきなり「年老いた」一人称の語り手が登場する。本格的に小説家としての道を歩むべく、ベルリンからシュトゥットガルトに居を移したヴィルヘルム・ラーベがその翌年の1863年に世に問うた『ライラックの花(Holunderblüte)』は処女作『雀横丁年代記(Die Chronik der Sperlingsgasse)』(1856)と同じく、老人による〈過去の回想〉という物語形式を取っている。〈シュトゥットガルト三部作〉と呼ばれることもある『飢えたる牧師(Der Hungerpastor)』(1864)、『アブ・テルファン(Abu Telfan)』(1867)、『死体運搬車(Der Schüdderump)』(1870)の3つの長編小説への意欲的な取り組み、さらには短編『縦の木のエルゼ(Else von der Tanne)』(1865)における三人称小説形式による歴史小説への模索などを思えば、『ライラックの花』はややもすれば、ラーベにとっていまだに初期作品の域にとどまるものに過ぎないのではないかという印象を与えてしまう。しかし果たして本当にそうであろうか。

物語冒頭に戻ろう。時は1月の午後、ところはベルリン。〈私〉はとある邸宅を訪問している。医師として全力を尽くした治療の甲斐なくひとりの少女が20日前に短い生を終えた。少女の母親を慰め、力づけることが訪問の目的である。

ラーベの作品からの引用は全て Wilhelm Raabe, Sämtliche Werke, Braunschweiger Ausgabe, Göttingen 1974. による。以下BAと略記し、巻数頁数のみを示すことにする。

(1) BA 9/1, S.87.

私が足を踏み入れたのは、明るくて暖かくて心地よい部屋だった。ここでもまた、太陽はきらきらと鏡ガラスの窓に光を投げ込んでいた。ここでもまた、窓辺にはたくさんの高価な花が並べられており、その中ほどには愛玩用の小鳥のつがいを入れたきれいな鳥籠が置かれていた。蓋の開け放しになったピアノの上には開いたままの歌集がのっけていて、前には刺繍をした小さな椅子があった。周囲にあるものはすべて、ここに女性が、しかも若い女性が住んでいたことを示していた。どれもみな、ちょっぴり女の子っぽくて可愛いものだった。既婚女性や年配の独身女性ならば自分の居間をこのように飾りつけることはなかっただろう。私が無言で挨拶した婦人は、喪服を着て顔色も悪く、開け放しの引き出しの前で絨毯の上に跪いたまま、涙も涸れた、すっかり涙も涸れ果てた、悲しげな目で私を見上げた。彼女は毎日——絶えず死の苦しみのなか、香りと輝きに包まれて、今は亡き、二度と還らぬ娘の香りと輝きに包まれて呆然と時を過ごしていたのである。⁽²⁾

少女の遺品の数々、そしてそれらをひとつひとつ愛おしむように整理する母親の姿が丹念に描き出されてゆくにつれて、我々読者までもが、この少女の在りし日の姿に思いを馳せる。しかしながら、〈私〉の視線がピアノの上ののっていた歌集の、開いた頁に記されていた歌詞に注がれた時、物語は予想外の展開を見せることになるのである。

運命があなたの手のひとつの幸福をのせたとしたら／もうひとつの幸せをあなたは手放さなければならない。／苦しみも利益も、あなたが保持することができるのはひとつずつ。／そして切に求めたものをあなたは苦々しく憎むようになる。

人間の手はまるで子供の手、／ただ掴みかかり、不注意にも壊してしまう。／手は地面に破片をまき散らし／手がまだ保持しているものも、自分のものであり続けることはない。

人間の手は手はまるで子供の手、／人間の心もまた、泣いてわめいておねだり

(2) BA 9/1, S. 89f.

する子供の心と変わりはない。／掴みかかるがいい、そして保持するがいい！・・・そこにあるのはただがらくたのみだ。／そしてついさっきまで笑っていた人々は、今では嘆き悲しまなければならない。

運命があなたの手に花冠をのせたとしたら／とても美しいその輝きを摘み取らなければならないのはあなた自身だ。／生命の輝きを壊し／散り散りになってしまった花びらを見て嘆くのはあなた自身だ。(3)

「掴みかかり、不注意にも壊してしまう」というくだりには、どこかゲーテの『野ばら (Heidenröslein)』を思い起こさせるところがあるものの、歌詞全体は民謡調というよりはむしろ教訓調である。かつて憧れ求めたもの、それを結局は手放さなければなくなる人間の姿が描き出されてゆく時、〈私〉の心に、「とうに過ぎ去った昔の、第一の追憶 (die erste Mahnung aus langvergängerer Zeit)」(4)が喪失感と共によみがえるが、「この手記に書き留めようとする一連の情念や情景の数々が繰り広げられる前に、第二のものが浮かび上がらなければならなかった。」(5)

「第二のもの (ein Zweites)」とは、いま〈私〉がいる部屋のかつての^{あるじ}主である少女への追憶に他ならない。年老いた一人称の語り手による回想、すなわち「第一の追憶 (die erste Mahnung)」はこの少女にまつわるものではなく、さらにずっと昔の出来事だったのである。「第一の追憶が繰り広げられる前に第二のものが浮かび上がらなければならなかった (Ein Zweites mußte dazu kommen, ehe sich die erste Mahnung entspann.)」という、一見順序が逆転しているように思われる表現は、「第一の追憶」と「第二のもの」におけるerstとzweitという言葉が、まずは〈身近な過去〉から、そして次に〈遠い過去〉へというような、いまの〈私〉からの時間的隔たりの順序ではなく、物語ることへの〈私〉の衝動・欲求の順序を示すものであると解釈することによって初めて理解可能となる。

しかしながらそれは同時に、「第一の追憶」が「第二のもの」によって〈堰き止められていた〉こと、逆に言えば、「第二のもの」は〈封印されていた過去〉である「第一の追憶」を解き放つ装置だったということを意味している。そしてさらにこの両者を記憶の連関として結びつけているものが、これもまた少女の遺品のひとつである「ラ

(3) BA 9/1, S.90f.

(4) Ebd.

(5) Ebd.

イラックの花冠」なのだ。

それは白と青のライラックの花と葉を巧みに、かわいらしく編んだものだった。一本の長いブロンドの髪の毛がその花冠に絡みついていた。それは、今は亡き少女が悪性の熱に冒される前夜の舞踏会のあと、頭から取った時に絡みついたものだった。[...]

私が今手にしている花冠の場合はそうではない。ほかのものとは違ってそれはライラックの花で出来ており、人の手によってしつらえられたものに過ぎないのであるが、新鮮な生気に満ちているので、頭にはとうに老いの白髪がまじるようになった老人の私でさえ、ますます遠ざかり、ますますぼやけてゆく彼方の青春時代へ連れ去られてゆく思いがするほどだった。若くしてこの世を去った少女のこの装飾品とはそもそも少しも関係のない思い出が甦ってきたのである。

私がこの花冠のことをじっくりと、つらいほど真剣に考えたのはライラックの花のせいだった。何故ならこの花冠は、部分的には私自身の手によって、間もなく両端が結び合わされるであろう私の人生とも絡み合っていた。

ピアノの上に開いたままのっていたあの歌詞は、この地上で短い幸福な呼吸をしたあとで、やさしく静かに、苦しみもなく眠りについた夭折の少女、小さな美しい頭の上に花環のような自らの人生の愛らしい象徴である美しい春の花の冠を載せていた夭折の少女よりも、むしろ私のために書かれたものだったのだ。⁽⁶⁾

これによってようやく、「私がこの手記にライラックの花(Holunderblüte)という表題をつけたことにはしかるべき理由が無いわけではない。Syringa vulgarisという学名を持つこの花が私にどのような影響を及ぼしたか、読者は間もなくおわかりになるだろう」⁽⁷⁾という〈私〉の予告が意味していたことが明らかになってくる。人家の近

(6) BA 9/1, S.91f.

(7) BA 9/1, S.88. 厳密に言えば、Holunderの学名はSambucus nigraであり、Syringa vulgarisはFliederにつけられた学名であるので、作品中のこの記述は不正確であるということになる。さらにまた、独和辞典では「ライラック」はもっぱらFliederの訳語として用いられており、Holunderは「ニワトコ」であるとされているので、この作品名“Holunderblüte”を『ライラックの花』と訳すこと自体が大いに問題ありということになってしまう。しかしながら実際にはこの両者は明確な区別がなされることなく、混同して名付けられることが多いという(BA 9/1, S.442.およびHandbuch des Deutschen Aberglaubens Band II, Berlin und Leipzig 1929/1930, Seite 1619.)。従って本稿においても、両者をことさらに区別せず、「ライラック」で統一することにする。

くに群生し、淡い色の花を咲かせるこの灌木は、特に手をかけなくても生育を続ける強靱な生命力を持つ一方で、墓地に植えられることも多いことから、実は〈死〉を象徴する植物として認識されることがあるのだ⁽⁸⁾。

〈私〉が手にするライラックの花冠は、少女がこの世での短い生を^{あかし}証であると同時に、〈死〉そのものからのメッセージでもあったのである。少女の死とライラックの花が象徴する〈死〉——この両者が重なり合い、〈私〉の心に「第一の追憶」が甦るのだとすれば、そこにもまた〈死〉の影が忍び寄ることになる。

我々はここで用いられている、「追憶(Mahnung)」という言葉が、Erinnerungのようにただ単に〈思い出〉を意味するだけではなく、「督促、催促」といったニュアンスをうちに含んでいることに注意を傾けなければならない。すなわち、年老いた〈私〉のこの手記において、〈過去〉は〈いま〉の視点から振り返り、懐かしむものとして描き出されているのではなく、〈いま〉の自分の心の奥底にしまい込まれていたものが、何ものかによって——ここでは〈ライラックの花冠〉によって——「促され」、甦るものとして描き出されているのである。そこには短編小説『ライラックの花』に重層構造を与えようとする作家ラーベの意欲的な試みが見て取れる。

〈私〉の眼前には古都プラハの町が広がる。「ライラックの花」が導くところ、それは「ベト・ハイム (生命の家)」⁽⁹⁾と呼ばれるユダヤ人墓地だったのだ。

II. プラハ滞在、つかの間の宥和

この7年間の悲惨な隷属状態がついに終わった時、もちろん私は鎖から解き放たれた動物のように飛び出した。そしてこのような教育の、大昔からあるが決して理解できない結果が現れた。大学での私は最も荒くれで始末におえない学生のうちのひとりだった。私は威厳のある教授たちの間でよりもむしろ、品のない学生の間で名を馳せてしまったのだ。もちろん私は、私の後見人である伯父の領域からは出来る限り遠くへと逃げ去り、ウィーンで学問の道を歩み始

(8) Handbuch des Deutschen Aberglaubens Band IV, a. a. O., S. 262ff.

(9) 「ベト・ハイム(Beth-Chaim)」は「生命の家」を意味するヘブライ語である。ちなみに、『ライラックの花』には『〈生命の家〉の思い出(Eine Erinnerung aus dem "Hause des Lebens")』というサブ・タイトルがついている。ユダヤ人墓地が〈墓地〉でありながら〈生命の家〉と名付けられていることと、ライラックの花が強靱な生命力を有する一方で死の象徴でもあること。この2つの〈逆説〉がタイトルとサブ・タイトルにおいて絡み合っていて非常に興味深い。

めた。というのも、ウィーンは当時まだ、古く楽しい町だったからである。しかし、ウィーンでの私の立場が危うくなり、多くの人の目が私の行動に注がれるようになった時、私は医学の講座で名高かったプラハへ移った。⁽¹⁰⁾

幼くして両親を亡くした〈私〉は少年時代、後見である伯父の常軌を逸した監視の下で厳格に育て上げられた。しかし伯父のもとを離れ、ウィーンでの大学生活が始まると、〈私〉の生活は少年時代の反動で放蕩の限りを尽くすようになる。このようにして規律と放埒の両極端を充分すぎるほどに体験した後であるがゆえに、プラハへ向かう〈私〉にはそれなりの覚悟があった。

プラハ大学医学部のありとあらゆる誉れとなって、勤勉を極め、いままでなおざりにしてきたことを熱心に取り戻そうという確固とした意図を持って私は楽しい町ウィーンからここプラハへやって来たのだ。⁽¹¹⁾

1348年に、ドイツ国王にしてボヘミア国王、そして後の神聖ローマ帝国皇帝となったカール4世(ボヘミア国王としてはカレル1世)によって創立されたプラハ大学⁽¹²⁾は、ヨーロッパ最古の大学のひとつとして、その伝統を誇っていた。ところが、「このころ病理学や治療学を学ぶ可能性はなく、人間の遺体を解剖したり、犬や猫やウサギや蛙の生体解剖をすることが出来なかった。そのため私はプラハでもこれらの勉強をあきらめ、勤勉に学ぼうという意図を、あとで別の時に別の大学で実践することにした」⁽¹³⁾という事情もあり、〈私〉は学業に関して言えばプラハの地で医学の道に進むというわけには決していかなかった。しかしながら、今までの自分からの脱却を図るべく、プラハという新たな環境の中でさまざまに見聞を広めようとする〈私〉の意思はかえってより一層強く働くこととなる。敢えて言えば、〈私〉にとってプラハ移住は、自己を啓発し陶冶するための旅、Bildungsreiseだったのである。

ネカザールカ小路の部屋で、私はもうもうと煙草の紫煙をくゆらせながら、

(10) BA 9/1, S.93.

(11) BA 9/1, S.99.

(12) 1316年にプラハで生まれたカール4世は教養ある君主として知られていた。プラハ大学は現在、創設者である彼の名(チェコ語読み)にちなんで「カレル大学」と呼ばれている。

(13) BA 9/1, S.100.

堅いソファーに横になって、人間の心の不思議について憂鬱に、しかし理性的に考察をめぐらせた。とは言え、情熱がどのように生じ、どのように消えてゆくのかについて一冊の本を書くことなど、もちろん私にはとても出来なかつただろう。私は、心ゆくまで煙草を吸い、夢見心地に時を過ごした後、ソファーから身を起こし、立ったままで夢の続きを見続けた。そして、町それ自体が夢のようなこの町の小路をさまよい歩いた。

大広場で私は、娘たちが噴水のそばで、ボヘミアことばとドイツ語をまぜこぜにしてしゃべっているのに耳を傾けた。夕暮れ時に私は、聖母マリア記念塔のそばで敬虔な祈りを捧げる人々の歌うような声に耳を傾けた。市庁舎の歩哨に立っていたハンガリー人の擲弾兵がイタリア兵と交替した、まるで色とりどりの人生が魔法のランタンの中で入れ替わるようにして。それからまた、ある時には私はヴィシエハラートの丘を歩き回った。そこでは、廃墟となった王宮の上を鷺鳥がガアガア鳴き、山羊が草をはみ、ほろほろの洗濯物が干してあった。またある時には私は、名高い橋の上にある聖者ヨハネス・フォン・ネポムク像の下で手すりにもたれながら、不滅で理性的な自分の心に、それがなぜなのか説明できないまま、何時間もモルダウの流れを見下ろしていた。それから私は、モルダウ左岸の急坂の小路を歩いてハラットシンへの階段を登って、胸壁ごしに誇り高さボヘミアの町が足下に広がるのを見た。また、暑い夏のひとときを私はしばしば、聖ファイト大聖堂の涼しくて薄暗い広間で過ごした。⁽¹⁴⁾

ボヘミア人の誇りであると同時に、さまざまの言葉が飛び交い、さまざまな国の人々が行き交う多様性の町でもあるプラハで、若さゆえ時に夢見心地になりつつも、〈私〉は貪欲なまで見聞を広めようとしている。

そんなプラハの町で〈私〉が何物にもまして最も強く引きつけられたのがユダヤ人墓地だった。しかしながらプラハ到着後ほどなくまず訪れるのがなぜユダヤ人墓地なのか、道案内のめどが立たなくなってしまう⁽¹⁵⁾、「ゲルマン人のねばり強さで (mit germanischer Ausdauer)」⁽¹⁶⁾自力で場所を突き止めた執念はどこから来るものなのか、読者には一切説明されることがない。あたかもそれが運命の導きによるもの

⁽¹⁴⁾ BA 9/1, S.100f.

⁽¹⁵⁾ 案内を引き受けた少女イエミーマが〈私〉にいたずらをして、ユダヤ人墓地と偽って救貧院に連れて行き、姿をくらましてしまったのである。

⁽¹⁶⁾ BA 9/1, S.97.

だと言わんばかりである。こうして目的地に至った〈私〉であったが、目の前に広がる光景はまさに想像を絶するものだった。

私は無数の、ぎっしりと重なり合った墓石と、そのまわりや上方に節くれだった枝を巻きつかせ、広げている太古のライラックの樹木を見た。狭い通路に入ると、レヴィ家の紋章である水瓶や、アロンの祝福の手の紋章、それからイスラエルのブドウ紋章が目に入った。敬意を示すために、他の人々と同様に、私は小石を高名なラビ、イエフダ・レーフ・バル・ベザレエルの墓の上に置いた。それから14世紀に造られた黒い墓石の上に腰をおろした。するとこの場所に漂う畏敬の念が私を十分に包み込んだ。

千年も前から、生きたユダヤ人たちがゲットーの狭い壁の中に閉じこめられたように、神に選ばれた民であるユダヤ人の死者たちもまた、ここに押し込められたのである。ぼかぼか陽気の春だった。時折さわやかな微風がライラックの枝と花をゆすると、ライラックはかすかに墓石の上でざわめき、大気を甘い香りで満たした。けれども私はますます息苦しくなった。この場所がベト・ハイム、生命の家と呼ばれているなんて！

悪意によって苦しめられ、虐待され、軽蔑され、不安に打ちのめされた多くの人々を何世代にもわたって飲み込んできた大地、底なしの貪欲な沼のように、次々と命が沈み込んでいった大地——この黒々と湿って腐食した大地からは、死体が置き去りにされた戦場からよりもさらに息苦しい、腐敗の息吹が立ちのぼった。それは充分すぎるほど不気味で、太陽の輝きも春の薫りも花の香りも、全てを打ち消してしまうほどだったのである。⁽¹⁷⁾

ゲットーの「狭い壁の中」で生活することを強いられたユダヤ人たちは死してなお、壁で仕切られた狭い空間に「押し込められた」のである。墓地はその収容の限界をはるかに超え、古い墓石の上に新たに墓石を文字通り積み重ねてゆくよりほかに、埋葬

(17) Ebd. ラーベは1859年5月に1週間ほどプラハに滞在しており、ユダヤ人墓地も訪れている。その時の日記には、敬意の印として小石を墓石の上に置いたこと、墓石に刻まれた水瓶や祝福の手やブドウの紋章のことが書き記されており、『ライラックの花』におけるこの描写が作家の実体験に基づくものであることが伺える。ただしラーベ自身がユダヤ人墓地を前にしてどのような印象を持ったのかについては、日記には一切書かれていない(BA 9/1, S.438.)。

を続ける方法がなくなってしまうていた。ぎっしりと幾層にも積み重なった無数の墓石は、何世紀にもわたるプラハでのユダヤ人差別の歴史を赤裸々に伝えている。〈私〉が感じる「息苦しさ」とは、このようなユダヤ人の苦難の歴史の重みに他ならない。18世紀末、モーツアルトの庇護者として知られる啓蒙君主ヨーゼフ2世の命によりユダヤ人墓地への埋葬が禁じられ、墓石の堆積によりやく終止符が打たれることとなった⁽¹⁸⁾。〈私〉が墓地に足を踏み入れたのは、それから半世紀を経ずしてのことである。

〈大学〉から〈ユダヤ人墓地〉へ——〈私〉はある意味で、プラハの町における〈ヨーロッパ〉の両極を体験したことになりはしないだろうか。なぜならば、ラテン語を公用語とし、学問の普遍性を追求する場としての前者がヨーロッパの〈光の世界〉であるのに対して、後者は、国を持たない民族に対する差別を後の世に伝える、ヨーロッパの〈陰の世界〉と考えることができるからである。

どんな方法によっても、そのメランコリックな魅力を充分に伝えることが出来なような日々であり、時であり、瞬間であった。ああ、あの太古の墓地とライラックの花。この場所の空気も、今ではもはや私にとって息苦しいものではなかったし、木の葉を通して射し込み、墓石の上で踊る太陽の光の中に、もはやどんな亡霊も現れることはなかった。次第に私はこれらの灰色の墓石に親しみを感じるようになった。⁽¹⁹⁾

(18) イェミーマは〈私〉に次のように言う、「そのあと、よき皇帝のヨーゼフさまが私たちの民族をここにさらに埋葬することを禁じたのです。[...] よき皇帝はユダヤ人街の壁も壊して、その街にご自身の穏やかで栄光に満ちたお名前をおつけになったのは、ご自身のためでもあるし、私たちのためでもあったのです。彼はこの牢獄を壊して、私たちが他の人々と一緒の空気を吸うようにして下さったのです。イスラエルの神があのお方の靈魂を祝福されますように(BA 9/1, S.104.)」。

ヨーゼフ2世は母マリア・テレジアの死後、農奴解放令や宗教寛容令を発布する一方でオーストリアの完全な中央集権化をめざした。「これらの改革は、絶対主義の枠のなかではあるが、合理的、進歩的なものが多かった。だが、ヨーゼフ2世はあまりに性急に何もかもいっせいにやりすぎた。また、いろいろな民族の伝統や権利をまったく無視した。[...]彼の失敗は、多民族の寄木細工であるオーストリアで中央集権化が当然ぶつかる運命であったが、一方、彼の猪突猛進、過度の主観主義にも原因があった。高い才能と良い意図にもかかわらず何事にも成功しなかったヨーゼフ2世こそは、フリードリヒ大王とはまたちがった意味で、啓蒙専制君主における理想と現実の分裂の一典型といえよう。」(『世界の歴史——8.絶対君主と人民』中央公論社、1968年、371~372頁。)ちなみに、モーツアルトは1787年10月29日にヨーゼフ2世治世下のプラハで『ドン・ジョヴァンニ』を初演した。

(19) BA 9/1, S.102.

すでに〈私〉は墓地の門番ともすっかり顔なじみとなり、「オーストリア帝国・ボヘミア王国の警察署が好奇心に満ちた外国人の旅費や財布から取り立てることを許可した6クロイツァー」⁽²⁰⁾の入場料も支払う必要がなくなっていた。プラハの町で〈私〉とユダヤ人たちとの距離は急速に近づいていったのである。その際、〈私〉にとって運命的とでも言うべき、最も大きな役割を果たすことになったのが、門番の親戚にあたるイエミーマという名の少女だった。

イエミーマは老人よりも上手に私に墓石のことをいろいろと教えてくれた。門番が肘掛け椅子で眠り込んだり、タルムードの果てしない解釈の理屈にあまりにも深入りしすぎた時には、私たちは彼のじゃまをしないように気をつけた。そして手に手を取って私たちはベト・ハイムの中へ忍び込み、世間の人々には好ましいものとはずっと思われていなかったこの奇妙な夏の日々、ふたりきりでいることだけで十分に満ち足りていたのだった。

ベト・ハイム、この墓地は私にとってまさに「生命の家」となったのである。この少女が私に墓石に記されたヘブライの見事な象形文字を説明してくれる時、彼女はそれによって、私がそれまで何もわかっていなかった人生を呼び起こしてくれたのである。賢明で有徳で敬虔な男性たちや女性たち、高貴な忍耐者たち、そして美しい若者たちが何世紀にもわたって続いた眠りから目覚め、彼らの影は生き生きとした生命を取り戻した。まもなく私は、見知らぬ世界からの、しかしながらいまだに現在への多くの関わりを持ち続ける世界からのこれらすべての人々と親しい間柄になり、我がドイツ民族の歴史的人物や伝説的人物と同じように、彼らのことを信じるようになったのである。⁽²¹⁾

初めて墓地を訪れようとする〈私〉を、わざと間違った場所へ案内するいたずらをしかけたりして⁽²²⁾、まるで妖精のように振る舞う一方で、イエミーマは無数の墓石のひとつひとつから、そこに葬られた人がかつてこの世で生きた人生をひとつひとつ特定し、生き生きと再現するようにして〈私〉に語り聞かせることが出来た。ユダヤ

⁽²⁰⁾ BA 9/1, S.101.

⁽²¹⁾ BA 9/1, S.102.

⁽²²⁾ その際イエミーマが道案内の報酬として〈私〉に要求した金額が、墓地への入場料として門番が徴収するのと同じ金額の6クロイツァーであることは単なる偶然ではなく、最終的には〈私〉にとってイエミーマがユダヤ人墓地の、さらにはユダヤ民族の良き案内役になることをあらかじめ暗示するための、作家ラーベによる〈仕掛け〉と解釈することは出来ないだろう。

人を単に集団としてとらえるのではなく、個々の人格として、いわば「顔の見える」対象として感じることによって、〈私〉にとってのユダヤ人が、「信頼する (vertrauen)」ことのできる、「親しみのある (vertraut)」存在になったのである。「ふたりきりでいることだけで十分に満ち足りていた ([...] wir [...] waren uns selbst genug [...])」という言葉からは、未知のものとの宥和を実感することの出来た喜びが込められているようにも思えてくる。

しかしながら、イエミーマが深く通暁しており、有能な案内役として〈私〉を導き入れた世界、それは結局のところ〈死者の世界〉であることを忘れてはならない。「当時私は死に至る病に冒されており、潜行性の熱が私をむさぼっていた。人間の心の中をこのようなさまざまな、移ろいやすい姿や感情が行き交うのは、ただ熱にうかされた夢の中だけのことなのだ」⁽²³⁾という〈私〉自身の述懐は、ライラックの花が象徴する死の世界に翻弄された自らの過去の告白であり、前節で取り上げた「第一の追憶」の内実に他ならない。そして「第一の追憶」の中心にイエミーマの姿が浮かび上がる時、すでに彼女自身に死の影が忍び寄っており、〈私〉の実感したつかの間の宥和もまた、再び切り裂かれる時が迫っていたのである。

Ⅲ. ドイツへの逃避、遠ざかるヨーロッパ

[...]秋も半ばのある日、最初の冬の予感が巷^{ちまた}を吹き抜け、ライラックの葉が他の樹木の葉と同じようにさまざまに色づいた時——秋も半ばのある日、彼女は私の手を取って薄暗い通路を通過して墓地の壁のそばにある、今まで私たちがふたりではまだ一度も見たことがなかった墓石のところへ私を連れて行った。

その墓石を指さして彼女は言った。

「これが私なのよ」

墓石にはヘブライ文字で次のように刻まれていた。

マハラート

その下には年号が刻まれていた。

1780年

どうして私はそれほどまでに驚いたのだろうか。私がすっかり硬直してしまい、

(23) BA 9/1, S.103.

言葉もなく私の傍らにいる少女を見つめていたこと、それは愚かなことではなかっただろうか。

確かに彼女は笑わなかった。馬鹿げた思いつきがうまく行ったことを喜んではいなかった。真剣で悲しげな表情を浮かべて彼女は佇んでいた[...]。(24)

ユダヤ人墓地ベト・ハイムを遊び場とし、ベト・ハイムと共に育ったイエミーマは、そこに生育するライラックの花同様、〈死〉とあまりにも近づきすぎていた。そんな彼女が、ベト・ハイムに埋葬された最後の人物であるマハラートという少女のことを知るにいたる。踊り子マハラートはある伯爵から求愛されたのだが、この恋は成就せず、そのために伯爵は「名前と財産とピロードの上着と羽根飾りのついた帽子以外には何も持たずに」⁽²⁵⁾国外へ逃亡し、命を落とした。そしてマハラート自身もまた、心臓の病がもとで短い生涯を終えたのだという。自らの心臓の異変にも気づいていたイエミーマは、マハラートの運命を完全に自分の運命に重ね合わせる。イエミーマはもはや〈死者の世界の案内役〉ではなく、自らを〈死者の世界の住人〉と考えるようになっていたのだ。

「イエミーマ」、私は両手を組み、自分が何をしているかもわからずに叫んだ。
「イエミーマ、僕は君を愛している」。

けれども彼女は威嚇するように私に向かって片手を突き出し、怒って小さな足を踏みならした。「それは本当ではないわ。白い羽根飾りのついた帽子をかぶり、緑の制服に金の肩章をつけた青年もマハラートを愛していなかったのよ。彼女がその青年のために死んだと言う人は嘘をついているのよ。彼女には心臓の欠陥があり、私たちの民族の死者たちが彼女を自分たちのそばに呼び寄せたのよ。ヘルマン、あなたは私を愛しているっておっしゃったわ。でも、もしも私が今、彼女と同じように死者たちのところにおりていたら、あなたはその手で私を引き留めることはできないのよ」。

イエミーマが私を見つめた時の様子——それはまるで、彼女の黒い眼が私の心の奥底にひそんでいる秘密を取り出すかのようなようだった。もしも私が本当に彼女のことを愛していたら、私はこの眼差しに耐えて応えたことだろう。けれども彼女が正しかった。私は彼女を愛してはいなかったのだ。私はただ熱病にか

(24) BA 9/1, S.104.

(25) BA 9/1, S.106.

かっただけなのだ。だから私は眼をそらし、眼を伏せなければならなかった。

私は間違っていたわけではなかったし、裏切り者でもなかった。この哀れな少女と交際している間、いかなる^{よこしま}邪な考えも私の心に浮かんだことがなかった。しかし、身を切るようなこの不安が、思い出してもどこにもその原因が見つからない良心の痛みが、どこからやってくるのだろう。愛らしい少女が私に対して威嚇するように、眼光鋭く、手を突き出し、絶望の中で自らを守り——自らの愛に逆らっている様子をおずおずと、ほとんどびくびくしながら見た時、私は恐ろしいほどの責任が私の上のしかかるのを感じた。⁽²⁶⁾

イエミーマは、死者たちのもとへ呼び寄せられる運命を持った者を誰も引き留めることはできないと言うことによって、自らの世界を〈私〉の世界と峻別し、〈私〉のもとから離れていこうとしている。しかしながら、ふたりを隔てるものは、果たして〈死〉だけだったのだろうか。それはとてもあり得ないことだ。なぜならば、ここでイエミーマに、死という仮借のない厳粛なる現実を突きつけられた時、〈私〉があまりにもそれとはそぐわない、ほとんど〈迷走〉とも呼ぶべき心の揺れを見せているからである。つまり〈私〉は、イエミーマへの愛を打ち消し、「熱病にかかっていただけ(Ich war nur fiberkrank.)」と白状する一方で、「間違っていなかったし裏切り者でもなかった(Ich war nicht falsch, war kein Verräter.)」と主張したものの、さらに「身を切るような不安(die schneidende Angst)」や「良心の痛み(Gewissensbisse)」に苛^{さいな}まれ、身を引こうとするイエミーマに対して「恐ろしいほどの責任が私の上のしかかるのを感じた(Ich fühlte eine furchtbare Verantwortung auf mir lasten.)」と言っているのだ。

我々はもう一度イエミーマの言葉に耳を傾けなければならない。無数の墓石の堆積するユダヤ人墓地が自らの生活空間だったイエミーマにとって、〈死〉とは「死者たちのところへおりてゆく(zu den Toten herniedersteigen)」のみならず、自分の分身とでも言うべきマハラートの死に関して「私たちの民族の死者たちが彼女を自分たち

26) BA 9/1, S.106f. イエミーマの発話の直接引用という形式の中で、〈私〉の名前「ヘルマン」が、物語も終わり近くになったこの場面で初めて読者に知らされる。このことは、一人称の語り手が、非常に早い段階で自らの名前「ヨハネス・ヴァホルダー」を紹介する『雀横丁年代記』と著しい対照をなしている。『ライラックの花』における〈私〉が過去の自分を客体化することなく、あくまで今の自分の前に甦る過去を叙述する主体としての立場をとり続けている結果であると考えられる。

のそばに呼び寄せた(Unser totes Volk hat sie zu sich herabgezogen.)」と述べているように、民族の歴史との合一という意味合いを持つ。だとすれば、ここでイエミーマが強調していることは、死そのものではなく、自らのユダヤ人としてのアイデンティティなのではないだろうか。そして〈私〉が見せた心の揺れは、自らのユダヤ人への理解と信頼がうわべだけのものに過ぎないことを、より厳しい現実によって思い知らされたことに因るのではないだろうか。さらにふたりのやりとりがヒート・アップしてゆくうちに、両者の意識のずれはますます浮き彫りになってくるのである。

「イエミーマ、イエミーマ、僕は君に別の、もっとよい医者連れて来るよ。そうすれば君の胸を診察してくれて、君が思い違いをしていること、年老いた無免許医が誤診していることを君に言ってくれるはずだよ」と私は叫んだ。「君は生きるんだよ——長生きするんだよ。そして美しくて魅力的な女性になって、この腐敗と臭気から、この太古の戦慄から立ち去るんだ」。

「私がどこかへ行くというの。いいえ、私はここにとどまります。ここはエホバの宮殿が破壊されて以来、私の先祖が埋葬されているのだから。でもあなたは、あなたのお国に戻って、夢を忘れるように、私のことを忘れるのよ。だって私は夢なのだから。夢が終わって、薄明かりの醒めた朝があなたを目覚めさせ、なにもなかったとあなたに告げたら、あなたはそれに対して何ができるというの。立ち去って下さい、すぐに行くのよ。それがあなたの運命であり、私の運命なのよ。あなたはあなたのお国で教養のある立派な紳士になって、貧しい人たちや弱い人たちに優しく暖かくしてあげてね。だってあなたは私に対しても優しく、暖かかったのですから。私も貧しくて弱かった。だからもしもあなたがそうする気があれば、私にたくさんの苦しみを与えることだって、私にたくさん悪いことをもたらすことだって出来たでしょう。今、このライラックの花は盛りを過ぎたけれど、私は生きている。でもこの古い木々と茂みが来年の春に、花を墓石の上で互いにさしだし合う時には、私はマハラートのように、強大な権力の女帝マリア・テレジアと同じ年に死んだ踊り子のように、私は私の墓石の下でひっそりと静かに眠っていることでしょう。ライラックの花が咲く季節、プラハのユダヤ人街で生まれたイエミーマ・レーフのことをあなたはどれくらい長く覚えていてくれるかしら」。(27)

27) BA 9/1, S.107f. マリア・テレジアは1780年11月29日、63年の生涯を閉じた。なお、ここで「女帝(Kaiserin)」という言葉が用いられているが、実際には彼女は神聖ローマ帝国皇帝になったわけではない。

〈私〉にとって、イエミーマを救うことは、彼女を「腐敗と臭気(Dunst und Moder)」であり「太古の戦慄(der uralte Schauer)」であるユダヤ人墓地、さらにはユダヤ人社会から引き離すことに結局になってしまう。そんな〈私〉に対してイエミーマは激しく抵抗し、逆にユダヤ人としてのアイデンティティを強く主張することによって、ユダヤ人社会にとどまることを宣言するに至るのである。確かに、マハラートの時代、すなわちユダヤ人がゲッターに押し込められ、ユダヤ人以外との結婚が固く禁じられていたマリア・テレジア治世の時代とは異なり、この女帝の息子ヨーゼフ2世がとった寛容政策以後、プラハのユダヤ人はすでに〈解放〉されている。しかしながらこの〈解放〉には、ユダヤ人としてのアイデンティティを希薄化し、オーストリアへ〈同化〉しようとする支配者側の論理が働いていることもまた事実なのである。救いの手をさしのべようとする〈私〉に対してイエミーマが激しく抵抗したのは、彼女が〈私〉の中にこのような支配者の論理を感じ取ったからなのではないだろうか。だとすれば、それは〈私〉にとってもまた、あまりにもつらいことである。なぜならば、「あなたはあなたのお国へ戻るのよ(Du [...] wirst fortgehen nach deinem Vaterland.)」と言うことによってイエミーマは、〈私〉のアイデンティティが〈ドイツ人〉であることをも強調しているのだから。

[...] こうして私はプラハのユダヤ人街の哀れなイエミーマを見殺しにしてしまったのだ。だからこそ、他の人々みんなに悦ばれるライラックの花が、私には永遠に死と審判の花なのだ。

私は逃げた。しかし逃げ切ることは出来なかった。私を呼び戻そうとする嘆きの声を聞くまいとして私は耳をふさいだ。しかし昼となく夜となく、その声は聞こえてきた。

私はその冬ベルリンの大学で勉強した。一見あり得ないことに思えようとも——本当に勉強した。⁽²⁸⁾

⁽²⁸⁾ BA 9/1, S.113. ひと冬が過ぎて再びプラハを訪れた〈私〉だが、イエミーマはすでに亡くなっていた。時は5月15日。聖者ネボムクの大祭をひかえ、プラハの町はごったがえしていた。聖者ネボムクとは、ボヘミア王ヴェンツェルの妃の聴罪師として、妃の秘密を守り通したために王の怒りにふれ、モルダウ河に投げ込まれて溺死した人物であり、彼の立像は守護聖人としてカレル橋におかれている。ボヘミア人が宗教改革者ヤン・フスと並んで敬愛する存在なのである。プラハの町もまた、ハプスブルク帝国の支配から抜け出そうとするボヘミア人による民族主義が高まりつつあったのだ。

〈私〉の〈自己啓発の旅(Bildungsreise)〉は終わる。ベルリンで医学の勉強に専念することになったとは言え、〈私〉の視界はもはや広がりを見せることはない。そしてプラハでの出来事は〈私〉の記憶の奥底に封印されるのである。

今ここで、もしも『ライラックの花』を取って〈私〉の自己啓発、精神的発展を描き出す〈教養小説(Bildungsroman)〉をとらえるならば、ラーベのこの小品は〈マイナスの符号のついた教養小説〉ということになるであろう。そしてそれは、統一の名のもとに、〈プロイセン中心のドイツ〉に縮小してゆこうとする当時のドイツの風潮をどこか反映しているものかもしれない。しかしながら、このようにしてドイツが統一へと向かう時、〈ヨーロッパ〉が遠ざかってゆくことを作家ラーベは十分に自覚していたのではないだろうか。